



土木史フォーラム

Newsletter of Committee on Historical Studies in Civil Engineering
Japan Society of Civil Engineers

No.29 2005.9.

目次

文化財ニュース	文化財となった土木関連建造物等一覧	北河大次郎 阿部 貴弘	1
フォーラム	横須賀市の近代化遺産群～ネットワーク化の可能性	岡田 昌彰 横松 宗治	2
地域のニュース	野蒜築港と生涯学習 - 野蒜築港～そして伝説へ -	知野 泰明	3
	毎日オンエア! 宮崎の石造アーチ橋	緒方 英樹	4
学会の動き	平成 17 年度 第 31 回土木計画学研究発表会・春大会報告	田中 尚人	5
	平成 17 年度 第 25 回土木史研究発表会報告	岡田 智秀	5
	「土木史研究」論文集 Vol.25、審査付き論文の募集	北浦 勝	6
	平成 17 年度土木学会全国大会研究討論会報告	昌子 住江	7
	編集委員長を終えて～土木史は発想のみなもと～	横内 憲久	7
	土木史フォーラム小委員会平成 17 年度委員名簿		7
土木史関係図書	軍艦島の遺産、東京湾第三海堡建設史、岡山県の近代化遺産ほか	横松 宗治	8

文化財ニュース（文化財となった土木関連建造物等一覧）

登録有形文化財（平成16年12月答申分）

名称(建設年代)	特徴等	所在地
湯田中駅旧駅舎(昭和12年)	長野電鉄平穂線開業時の駅舎で、現在は交流施設として活用。正面に切妻破風を見せ、壁面をスティックスタイル風に仕上げる。	長野県 山ノ内町
旧名鉄美濃町線美濃駅本屋(大正12年)	美濃電気軌道新美濃駅として建設された頭端式の駅舎。本屋は正面東妻に木骨を装飾的に表し、本屋南面にはプラットフォームをコ字形に取り付ける。	岐阜県 美濃市
旧名鉄美濃町線美濃駅プラットホーム及び線路(大正12年)		
三野浄水場第一水源取水口(明治38年/大正15年増改造)		
三野浄水場線速ろ過池(明治38年/昭和初期増築)		
三野浄水場日動力室・送水ポンプ室(明治37年)	市街地の北方、旭川に面する三野浄水場の中で、水源取水口は創設時のものに第二拡張工事期のRC造のものを併設したもの。煉瓦造平屋建のポンプ室は正面にブロックペディメントを掲げ、木造車寄に菱格飾をあしらうなど密度の高い意匠を凝らす。浄水場北西に位置する半田山配水池には、全国的に類例の少ない円形配水池、瀟洒なつくりの創設量水室とその意匠を踏襲した増設量水室などが残る。鋼鉄連ワレントラスの京橋水管橋は、水道用鋼橋としては最初期のもので、コンクリート造橋脚を帯鉄で締め隅部を鉄板で保護する珍しい構造。創設時には吉村長策、佐野藤次郎等が工事に関与し、大正の増築時には大井清一指導のもと池田篤三郎が工事担当。	岡山県 岡山市
半田山配水池一号配水池(明治38年)		
半田山配水池二号配水池(明治38年)		
半田山配水池三号配水池(大正8年)		
半田山配水池創設量水室(明治38年)		
半田山配水池増設量水室(昭和14年)		
半田山配水池日事務所(明治38年)		
京橋水管橋(明治38年)		

登録有形文化財（平成 17 年 3 月答申分）

名称(建設年代)	特徴等	所在地
正法寺川北沢第一～五号石堰堤(大正11年)	大正2年の洪水被害を受けて、最上川水系倉津川に合流する普通河川正法寺川の最上流部に建設された一連の砂防施設。県技師木橋長命の調査に基づき、県土木技師補の佐藤總一郎の現場監督により工事が進められたと伝わる。第一号から第十号は、切石を用いた空積、布積で丁寧に築いた類例の少ない構造形式が特徴的で、天端幅を広げたり、袖に石張りの土堤を付けるなど、強度を高めるための工夫が見られる。第十一号より下流の堰堤は、谷積の練瓦堰堤で、この種のものとしては全国的に見ても初期のもの。急勾配の正法寺川右支沢には堰堤が密に配され、河床勾配の緩和を図る。また、正法寺川下流の鉄線蛇籠水制工は、川崎式鉄線を用いた鞍掛水制工の一種で、屈曲性に優れる。	山形県 天童市
正法寺川北沢第六～十号石堰堤(大正12年)		
正法寺川北沢第十二号石堰堤(大正12年)		
正法寺川北沢第十三～十五号石堰堤(大正13年)		
正法寺川狸沢第一～三号石堰堤(大正12年)		
正法寺川北沢鉄線蛇籠水制工(大正13年)		
横須賀市上下水道局見浄水場線速ろ過池調整室～(大正8年)	ほぼ南北に4基配された線速ろ過池の調整室上屋で、アングル材を用いて組み上げられた鉄骨を、梁間方向に3基並べ、RC造スラブを支えるという、RC技術が確立される前の形式に囚われない工法が見所。配水池の東西の入口は、開口部と内部空間を広くとる採光と換気に配慮したつくりで、直線を基調としたセセッション風の幾何学的デザインに、新たな時代の造形感覚を窺える。	神奈川県 横須賀市
横須賀市上下水道局見浄水場配水池東・西入口(大正8年)		
横須賀市上下水道局見浄水場ベンチルーメーター室(大正8年)		
旧国鉄越美南線北濃駅機関車庫(明治35年/昭和9年移設)	50ft規模のアメリカンブリッジ社製で、わが国に残る最古級の転車台。	岐阜県 郡上市
名古屋テレビ塔(昭和29年)	名古屋の戦後復興のシンボルで、テレビ放送用集約電波鉄塔として日本最古。構造設計は内藤多仲、鉄骨製作は新三菱重工業神戸造船所。	愛知県 名古屋市中区
綾部大橋(昭和4年)	ライズを抑えたボニー形式の鋼製7連曲弦ワレントラス橋で、木造でつくられた旧橋の形式が踏襲される。製作は松尾鉄骨橋梁株式会社。	京都府 綾部市
三軒橋(昭和9年)	RC造7連桁橋で、橋脚を円柱、貫、肘木等から構成し、床版両端で板敷風に目地を切り、橋上に宝珠高欄、春日灯籠を設けるなど木橋を意識した丁寧なデザイン。	鳥取県 三朝町
川口橋(昭和10年)	RC造6連桁橋で、断面形状に変化をつけた精緻なフランス風の煉瓦造橋脚や、幾何学的意匠の親柱が特徴的。現在は、市場のたつ広場空間としても活用。	高知県 吾川村

(文化庁 北河大次郎 パシフィックコンサルタンツ 阿部貴弘)

横須賀市の近代化遺産群～ネットワーク化の可能性

近畿大学理工学部社会環境工学科 岡田 昌彰
株式会社日本ランドデザイン 横松 宗治

1853年の浦賀沖へのペリー来航にはじまり、幕末より横須賀の近代工業化が急速に進められていった。横須賀製作所建設(1865年)、観音崎灯台の点灯(1869年)に端を発し、1884年には横須賀鎮守府が設置される。その後、省線横須賀線(1889年)、市営走水水道(1908年)などのインフラ整備とともに、観音崎や猿島での砲台建設、海軍用の逸見浄水場(写真)整備など、近代海軍都市としての礎が築かれていく。

現在も市内には鎮守府長官官舎(写真)、旧海軍工廠ドックをはじめとする海軍関連施設や、ヴォーリズの弟子・横田末吉設計の上町教会、煉瓦トンネルに挟まれたユニークなJR田浦駅など、近代化遺産あるいは地域資産として大きな可能性をもつものが多数点在している。これらの資産に対する地元の意識も高く、かつて筆者も所属していた「横須賀建築探偵団」などが市民主導で組織されその調査研究成果が地域雑誌や市文化会館での研究発表会などにおいて公開されてきた。しかし、このような草の根の活動やその成果が市民の各年齢層に十分にひろく周知されているとは言えず、地域資源をさらに積極的にアピールする余地もあると考えられる。横須賀市役所内には、文化財保護課、博物館、市史編纂室、都市計画課街づくり担当、文化振興課、緑政課など市内の近代化遺産整備に携わる機関がいくつかあるものの、猿島エコミュージアムの都市公園整備事業や博物館学芸員による年2回の「近代化遺産ツアー」など個別のイベントが各所で行われているのが現状である。

今年7月に市内で開催された全国近代化遺産活用連絡協議会(全近)にて「横須賀市内近代化遺産見学会」が市教育委員会と合同で催され、重文のスチームハンマーや観音崎の北門第一砲台、走水浄水池などが視察された。

この行事の成功は、市内に高密度で点在する遺産群をネットワーク化し一体的に探訪するコース設定が比較的容易かつ有効であることを示している。

現在、市が整備中の「海と風のプロムナード」はヴェルニー記念館から観音崎までを結ぶ約10kmの遊歩道構想であるが、これを工夫すれば沿道付近に点在する料亭小松、文化興業社屋、鮮麗なウサギのステンドグラス入り丸窓をもつ佐野医院などの近代建築群や、走水水源、旗山崎台場跡、三軒家砲台など数多くの近代化遺産群を連絡させ一体的にアピールすることが可能となろう。

小規模の看板建築から煉瓦造の水道隧道に至るまで、市内に現存する近代化遺産の多くは前述の建築探偵団などを中心として既に個別にリストアップされている状況にある。

これは市民意識の強さを反映した赫々たる成果と言えるが、同時に包括的・体系的な物件リストの整備とデータベース化が必要である。

日本の近代を確かに先導した都市・横須賀のアイデンティティを端的に示す歴史的資産として、各遺産の意味をその形成景観とともに強くアピールする施策が今後取られていくことを期待したい。



写真 左:逸見浄水場濾過池の塔 / 右:旧横須賀鎮守府長官官舎(筆者撮影)

土木遺産と教育活動(最終回)～野蒜築港と生涯学習

・ 野蒜築港～そして伝説へ ・

日本大学工学部土木工学科 知野 泰明

■はじめに

前号までに野蒜築港に関する地域活動について、その中心となっている方々3名からご寄稿戴いた。今回は、その総括として、土木遺産が地域資産、かつ、初等教育から生涯教育までに結びついてゆく過程を振り返り、その意義を考えたい。

■連載を振り返って

野蒜築港の経緯については、従来からすでに種々の研究や著作があり、新たな研究の展開が見られない状況にあった。また、地元の町史「鳴瀬町誌」でも頁をさいて、その経過が綴られていた。にもかかわらず、近年、小学生から大人までを惹きつける野蒜築港。

その諸活動に火をつけたのが、平成10年に土木学会東北支部において設置された野蒜築港120年委員会による、数々のシンポジウムと行事であった。

この動きは120年という時を経て、地元でも客観的に歴史を語れる時代になった故であろうか。否、それだけではなく、やはり、現存する築港跡地、そこで僅かに残る、突堤、レンガ橋台、など。そして北上、東名の両運河。重文となった石井閘門。それら数々の遺構が、生き証人として学習への探究心を駆り立てているのだと思う。これらに、従来、文字で記されてきた史実が結びつき、地元の多くの人々が、よりリアリティをもって体感できる時代に到達した。まさに時機を得たのであろう。

しかし、それ以上に重要なのが、知りたい、そして、伝えたいと思う人々を得たことである。歴史の伝道者、または通訳者とでも言おうか。

ある土木技術者の一人から「野蒜築港は失敗したもので、たいしたものは何も残っていないのではないか」と言われたことがある。その時、彼を説き伏せるほどの理論がなかった。今になって冷静に考えてみれば、こう言いたい。

明治政府は、その初頭に野蒜築港を含む国家的大規模土木事業に挑むため、わが国初の一般向け国債「起業公債」を発行し、投資者へ毎年、詳細な工事の進行状況を報告した。それほど、真摯に始まった事業が中止に至ったのである。不十分な計画、かつ技術力もなかったと言われてしまえばそれまでである。しかし、今日、その完遂されなかった明治政府の置き土産は、一地域のアイデンティティとなり、今や時代を超えた伝説になろうとしている。

野蒜築港は、まさに文化遺産以外の何ものでもなく、それを形而下のものとしたのは他ならぬ土木技術者なのである。

現役か否かにかかわらず、時代を超えた土木遺産たち。

それは、歴史に消えた人々の志と情熱を今に伝えているのであろう。

「土木遺産と教育活動～野蒜築港と生涯学習」は今号で終了となります。2年間ご愛読ありがとうございました。

毎日オンエア！宮崎の石造アーチ橋

(財)全国建設研修センター 緒方英樹

石橋の97%は九州にある、ということはお存じだろうか。

その中でも意外と知られていないのが宮崎の石橋。鹿児島や熊本、大分といった石橋王国のポピュラーさはないものの、150年以上の時を経た石橋や、現役の生活道路橋等が山あいにはばつねんと佇立している。

その数、90を超す。

土木遺産と呼ばれるようになった石橋は、かねてより人やモノをはこび、地域をつなぐ架け橋として今に至り、それぞれの風景に溶け込んできた。

そんな石橋を訪ねて紹介する番組が宮崎ケーブルテレビにある。

その名も「みやざき浪漫鉄道～石橋を渡る～」

月曜から日曜の夜15分間、今年の4月から連日放送中。

3年続く予定らしい。地域の土木遺産がこれほど放送されることは稀有であり、番組スタッフは石橋をただ映すのではなく、石橋がつなぐ地域性や人の関わりも醸し出していきたいと意気込んでいる。

カメラは、石橋とともに刻まれてきた歴史や風土に腰を据え、制作者は未来に残す文化遺産を撮る気概に満ち、橋の魅力に取り憑かれたディレクターやプロデューサーの顔は、土木遺産焼けして真っ黒だった。

「土木遺産を訪ねて～宮崎編」(財)全国建設研修センター)を参考文献としている。

番組は、みやざき浪漫紀行BLOGで検索できます！



宮崎の石橋と番組スタッフ

学会の動き

平成 17 年度 第 31 回土木計画学研究発表会・春大会報告

平成 17 年 6 月 4 日、5 日の 2 日間広島大学工学部キャンパスにおいて、第 31 回土木計画学研究発表会が開催された。

土木計画学研究発表会が、春・秋の年二回開催されるようになり今年で 4 年目を迎えるが、本年度の計画学春大会では残念ながら土木史に関する論文発表はなかった。

計画学春大会では一般形式の論文募集はなされず、先見性や話題性があり集中的に討議すべき企画セッションが中心として運営される。

土木史を単に過去の事実の定着に止まらせ

ず、土木工学全体の来し方行く末を考える指針として活用していくためにも、ぜひ次回計画学秋大会(於:宮崎大学)次年度春大会(於:東北大学)には積極的な論文投稿、企画運営が望まれる。

また、本年度より景観デザイン研究発表会も開催される(12 月 10 日、11 日、於:日本大学駿河台キャンパス、講演論文〆切 9 月 1 日)運びとなった。この分野でも、土木史の知見を活かした活発な議論が展開されることを期待したい。

(岐阜大学 田中尚人)

平成 17 年度 第 25 回土木史研究発表会報告

本年度の土木史研究発表会(第 25 回)が去る 6 月 18 日、19 日の 2 日間にわたり、日本大学理工学部・船橋キャンパスにて開催された。

本会のメイン行事となる研究発表では合計 68 編の論文が発表され、セッションとしては橋梁、交通、遺産、都市など 19 にのぼった。発表会場では本会の魅力である、若手発表者とフロアの先達の方々との活発かつ有意義な意見交換が繰り広げられていた。

一方、本学は都内(御茶ノ水)と千葉県(船橋)にキャンパスをもつが、あえて郊外の船橋キャンパスが開催地となったのには理由があった。それは、当キャンパスでは、本年より本学に縁のある人物や研究に関する歴史(資史料、実験装置、発明品等)を編纂し、それを公開・展示する「CST ミュージアム」が開設され、土木史に関心が高い方々にもその内容をお知らせしたかったためである。折しも、このミュージアムに関して、計画・交通研究会および八十島義之助先生の奥様よりご寄贈いただいたご本人の蔵書(八十島義之助文庫)の公開日と重なったため(特別企画

画展開催中:9 月 30 日まで)、そのオープニングセレモニーでは、八十島先生の奥様とともに、本会参加者にも多数ご参加いただいた(写真)。また、研究発表会の開催校企画セッションでは、CST ミュージアムの概要や活動内容に関する報告とともに、本会に合わせたテーマとして、本学に縁のある都市計画家である、新谷洋二先生、八十島義之助先生、市川清志先生、笠原敏郎先生の功績などが紹介された。

また、本会の楽しみのひとつである懇親会では、開業したばかりのインターネットカフェ・珈琲館において、自家製オードブルのほか千葉県名産の梨ワインやピーナツなどを片手に、様々な話題で盛り上がりを見せていた。その合間には、恒例の次回開催校発表があり、その担当となる為国氏より、足利工業大学であることが報告されると会場は大いに沸いた。

この 2 日間にわたる本会参加者は延べ 180 人、懇親会参加者は 70 人であり、船橋キャンパスが土木史の話題一色で賑わった魅力的な 2 日間となった。

(日本大学 岡田智秀)



写真提供:橋本昭夫氏(計画・交通研究会)、取材協力:宇於崎勝也氏・大沢昌玄氏(日本大学)

写真 左:発表会風景 / 中央:八十島文庫公開除幕式での八十島婦人と高田邦道理工学部次長 / 右:懇親会で挨拶する伊東孝土木史研究委員長

「土木史研究・論文集 Vol.25」審査付き論文の募集 【原稿締切：9月30日（金）必着】

土木史研究委員会副委員長 北浦 勝(金沢大学)

土木史研究委員会(委員長:伊東 孝・日本大学教授)では、土木史研究発表会の講演用論文を対象として、「土木史研究・論文集 Vol.25」の審査付き論文を下記のように募集いたしますので、奮ってご投稿下さい。

土木史研究の審査付き論文を投稿するにはまず土木史研究発表会でご発表いただき(発表審査)、そのときに出された色々な意見・助言をもとに「審査付き論文」としてまとめていただく形となっております。従いまして、土木史研究発表会でご発表いただいていない論文は審査の対象となりませんので、くれぐれもご注意ください。

講演集に掲載されていても口頭発表の行われなかった論文は審査の対象とはなりません。

1. 論文審査の申込み

第25回土木史研究発表会もしくはそれ以前の研究発表会で発表された講演用論文を、発表会での討議等をもとに内容を充実させ、下記2.の提出方法に基づいて審査付き論文として提出して下さい。使用言語は日本語または英語とします。題目、著者名等の変更、あるいは、複数論文の合体等は可能ですが、発表内容と著しく異なる論文は、発表会の場合論文の一次審査の場であることから、審査対象とならない可能性があります。また、他の論文集(審査付き論文集だけでなく、無審査でも著名な学術雑誌)と内容が重複するような論文の投稿は禁じられております。ただし1人何編でも第1著者として投稿できます。論文の著者には、1投稿論文につき論文集1冊を無料配布いたします。なお、論文集を1冊以上ご希望の場合、事前予約はEメールでも受け付けます。その際は、書名(土木史研究・論文集 Vol.25)、購入部数、氏名、送付先住所、会員区分、電話番号、請求書宛名を明記の上、事務局(hashimoto@jsce.or.jp)宛にお送り下さい。

2. 審査用論文の提出方法

■提出締切:2005年9月30日(金) 必着(注1)

■論文送付書:A4判の用紙に自由書式で、以下の項目について記載し送付書とする。

論文名、主著者名・所属・学会員の種別及び会員番号、連名者名・所属、連絡先(住所、電話、Faxまたはe-mailアドレス)、審査部門(下記注2参照)、発表会の名称及び講演番号・論文名・著者名、発表時の講演論文からの継承性について(下記注3参照)、掲載料の支払方法(郵便振替、現金書留、銀行振込)、別刷部数、論文集の事前予約(する、しない)を明記のこと(請求書式に指定がある場合はその旨も明記)。

■提出方法:本原稿を1部、原稿コピーを4部(A4判、1部ずつホッチキス左上止め、両面可)をA4判封筒に入れて提出のこと(1封筒に1セット)。なお、提出は郵送のみとする。

■提出先:(社)土木学会 土木史研究編集小委員会

〒160-0004 東京都新宿区四谷1丁目無番地 / Tel:03-3355-3559, FAX:03-5379-0125

■頁数:最大20頁 ■審査料:1編10,000円

■掲載料:3,500円/頁(例:9頁ならば、9頁×3,500円=31,500円)著者負担によりカラー印刷も受付ます。

1頁50,000円ですが、印刷上両面カラー印刷になりますので、ご請求は1頁の場合でも100,000円となります。

■別刷料:別途請求(50部単位)

注1)提出締切は必着です。

注2)論文送付書に記述する審査部門は、下記の4部門の中から原則1つ(複数選択も可)を選んで下さい。

a. 史実部門 b. 解釈部門 c. 萌芽部門 d. 重点部門

a. 史実部門は、今まで公開されなかった一次資料をもとにした「新発見」の事実を披瀝する論文です。

b. 解釈部門は、二・三次資料を活用しつつ、従前の研究を新しい解釈で再構築する論文です。

一部のa.を基礎に、主としてb.を行っている論文は、「b」あるいは「aとb」と記載してください。c. 萌芽部門はユニークで全く新規な切り口の論文、d. 重点部門は土木遺産の保存・活用事例報告に関するもの、長期にわたる特定プロジェクトの史的検証に関わるものの2小部門となっております。

送付書に記載する審査部門は、上記の4部門の中から1つないし複数を選択・記入してください。

注3)論文送付書に記述する「継承性」については、下記のa.～c.の中から該当するものを1つ選んで記載して頂き、別紙添付書類として、「発表会時に受けた質疑応答の内容、および投稿論文における対応」を記述下さい(審査時の資料とします)。

a. 継続:発表会の講演論文を元に(80%程度)、質疑応答時の意見を反映させた。

b. 分割:発表会の講演論文の一部に、質疑応答時の意見を反映させて執筆した。

c. 統合:発表会時は、2本の関連した講演論文であったものを、質疑応答時の意見を反映させ1つに統合した。

3. 審査付き論文の作成方法

土木史研究編集小委員会が決定した執筆要領および書式見本に基づき、A4判の用紙(左右210mm、上下297mm)を使用し、ワープロ・タイプにて印字して下さい。なお最終的に採用された場合、原稿はそのままオフセット印刷しますので、特に図表等は縮小しても充分読みとれるよう、注意して作成してください。

4. 審査方法

土木史研究編集小委員会が審査を行います。審査の判定は、第1回判定(1月中旬)で採用、軽度の条件付採用、重度の条件付採用、不採用の4ランクに分けます。うち条件付採用論文については、軽度か重度でその内容に程度の差はありますが、修正結果を見て採否を判定します(4月)。採択された論文は「土木史研究・論文集 Vol.25」(2006年5月刊)に掲載されます。

5. 送付先および問合せ先

土木学会土木史研究編集小委員会 (担当職員:橋本剛志)

(〒160-0004 新宿区四谷一丁目無番地, Tel:03-3355-3559 / FAX:03-5379-0125, E-Mail: hashimoto@jsce.or.jp)

学会の動き(つづき)

平成 17 年度土木学会全国大会研究討論会報告

「どう遺す、どう活かす・未来への遺産土木アーカイブズ」

話題提供者に、坂本真至氏(土木図書館)、馬淵浩一氏(名古屋市科学館)、有井宏子氏(大阪府狭山池博物館)、コメンテーターに安藤正人氏(人間文化研究機構国文学研究資料館アーカイブズ研究系教授)をお招きし、標記のタイトルで研究討論会を開催した(9月9日(金)13:00~14:30 於早稲田大学8号館B-102)。

坂本氏は、土木図書館におけるデジタルアーカイブズ化の取り組みと今後の課題を、馬淵氏は、当初工事記録として撮影された発電所建設記録映像が、フィルム劣化対策のための映像デジタル化とデータベース化で、過去の技術・技能の活用を補完するツールとしての新たな価値

が加わったことを報告した。有井氏からは、狭山池博物館でのデータベース構築作業について、具体的な課題と対応策についての報告があった。安藤氏は、アーカイブズ学の立場から、アーカイブズの一般的な価値や保存の方法的基礎についてコメントするとともに、アーカイブズは他の記録との関係性が大切であり、そのためのネットワークとシステムづくりの重要性と、これを支える研究面の充実と人材育成を提言した。

そのあと限られた時間ではあったが、フロアーとの間で熱心な質疑が交わされた。

(関東学院大学 昌子住江)

編集委員長を終えて ~土木史は発想のみなもと~

必ずしも土木史を専門としない私が、編集委員長をお引き受けさせていただいたのは、歴史への好奇心と魅力ある人々とのつながりを求めたからでした。委員や事務局の皆様の力をいただき、就任期間の2年間で予定どおり25~29号を発行することができ、心より感謝申し上げます。さて、この2年間フォーラムの発行を巡っていくつか考えさせられることが起きました。

ひとつは、年2回発行・郵便配布からインターネット配信への転換案です。経済的有利さはもっともだと思われますが、いつでもどこでも手軽に読める紙媒体はまだ格段に利用価値が高

いということで、親委員会には無理をいい年2回の発行になりましたが、これからも郵送配布としました。もうひとつは、土木史の若手研究者が少なくなったのではと思われる点です。大学にフォーラムの事務局を置くにも苦勞するほどです。歴史を学ぶのは、アイデンティティを再確認し、相対化し、新たなアイデンティティを選び取り、創造することにつながります。土木史フォーラムをとおして歴史・土木の面白さが分かる青年が増えることを願います。私の好奇心は益々旺盛になり仲間も増えました。

(日本大学 横内憲久)

土木史フォーラム小委員会平成 17 年度委員名簿

委員長	五十畑 弘 (日本大学)	地域委員	安達 實 (真柄建設㈱)
幹事長	田中 尚人 (岐阜大学)		有井 宏子 (大阪府教育委員会)
常任委員	阿部 貴弘 (パシフィックコンサルタンツ㈱)		岡田 昌彰 (近畿大学)
	神田 恭太郎 (川鉄橋梁鉄構㈱)		木村 一裕 (秋田大学)
	日野 智 (秋田工業高等専門学校)		田中 邦博 (九州共立大学)
	桒山 清人 ((財)全国建設研修センター)		樋口 輝久 (岡山大学)
(事務局兼担)	山田 圭二郎 (㈱オリエンタルコンサルタンツ)		松山 正将 (東北工業大学)
	横松 宗治 (㈱日本ランドデザイン)		宮本 裕 (岩手大学)
学会事務局	橋本 剛志		

書名	著者・編者	発行所・発行日	定価(税込)
軍艦島の遺産 風化する日本の象徴	後藤恵之輔・坂本道徳著	長崎新聞社・2005/04	¥952-
本書は、社会基盤工学の研究者と軍艦島(長崎県端島)に少年期を過ごした島民の共著である。端島を歴史的、社会的そして技術的に位置づける視点と、類希なこの島の生活のディテールとがともに述べられている。わが国の近代化の普遍的な姿を汲み取ることもできる。			
東京湾第三海堡建設史	東京湾第三海堡建設史刊行委員会	(社)日本港湾協会・2005/03	¥6,300-
本書は、東京湾海堡に関して膨大な資料・図面類を収集・編纂した傑作である。口絵には色鮮やかな数々の貴重な海堡図面類が掲載され、本編は「江戸湾海防計画」にはじまり、参考とした外国の要塞、東京湾海堡計画の立案・建設・施工技術・関わった組織と人々、東京湾要塞遺跡、海洋港湾技術など全8章で構成される。資料編では、講演集(幕末江戸湾防衛論、明治期のコンクリートブロック・煉瓦、第3海堡撤去事業等)と資料集(防波堤・海堡事例集、海堡関連新聞記事等)が満載されている。その他、索引(人名、地名、文書名、事項)も充実。内容の充実ぶりに比べ手頃な価格も魅力だ。(岡田智秀・記)			
ゴールデンゲート物語 夢に橋を懸けたアメリカ人	中川良隆著	鹿島出版会・2005/04 下期	¥1,890-
日本人はどのように国土をつくったか 地文学事始	上田篤・中村良夫・樋口忠彦編	学芸出版会・2005/04 下期	¥3,150-
岡山県の近代化遺産～報告書	岡山県教育委員会	岡山県教育委員会 2005/03	¥1,500-
本書は、県内において幕末から第2次世界大戦前までに整備された旧倉敷紡績倉敷本社工場や児島湾の干拓樋門など、県内の優れた歴史的建造物を収集。その数1,500件にのぼる。これらを産業や交通など11に分類し、これらの中から保存状態が良い代表的事例として124項目260件を解説付写真によって紹介。 問合せ先:岡山県文化財課 086-224-5591 詳細は http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/bunka/hogo/kindaika/kohosiryo.htm (岡田智秀・記)			

(日本ランドデザイン 横松宗治)

編集後記 「小さなことを重ねることが、大きなことを成し遂げるただ一つの道」とは、米メジャー最多安打記録を持つイチローの言葉。

次号から新たな編集体制で臨む土木史フォーラムですが、より多くの土木史ファンに楽しんでいただけるよう、これからも一冊々々大切に号を重ねていきたいと思います。(阿部貴弘)

土木史フォーラム No.29

監修：土木学会土木史研究委員会
発行：土木史フォーラム小委員会
代表者 横内 憲久(日本大学)
事務局：日本大学理工学部 岡田 智秀
〒274-8501 千葉県船橋市習志野台 7-24-1
TEL&FAX.047-469-5427(直通)
Email : t-okada@ocean.cst.nihon-u.ac.jp
<http://www.jsce.or.jp/committee/hsce/index.htm>
印刷：(株)青孔社

CONTENTS

-CIVIL ENGINEERING WORKS ON LATEST HERITAGE REGISTRATION LIST		
	KITAGAWA Daijiro , ABE Takahiro	1
-FORUM		
Heritage group of modernization era in Yokosuka City ~ Possibility of information network	OKADA Masaaki & YOKOMATSU Muneharu	2
Civil engineering heritages and the educational activities ~ Nobiru port and lifelong learning	CHINO Yasuaki	3
-LOCAL NEWS		
Every day on the air ! Stone arch bridges in Miyazaki	OGATA Hideki	4
-REPORT FROM CHSCE(Committee on Historical Studies in Civil Engineering)		
Report on 31 st meeting of Infrastructure Planning Review	TANAKA Naoto	5
Report of 25 th conference of CHSCE	OKADA Tomohide	5
About the revision of contribution regulations in the papers of civil engineering history	KITAURA Masaru	6
Workshop in annual meeting JSCE	SHOJI Sumie	7
committee members list 2005		7
Greeting at edit chairman's termination	YOKOUCHI Norihisa	7
-BOOK GUIDE	YOKOMATSU Muneharu	8

■編集委員会 委員長:横内憲久、幹事長:知野泰明

委員:阿部貴弘、岡田智秀、神田恭太郎、日野 智、桝山清人、山田圭二郎、横松宗治 / 学会事務局:橋本剛志